

「防潮堤を勉強する会」がもたらしたもの

気仙沼市民有志による「防潮堤を勉強する会」

向を反映した複数のケースを出す必要があると思ふと語り、お互いに考え方を尊重することの必要性を強調した。

「防潮堤を勉強する会」の最終回の勉強会で菅原茂気仙沼市長は、これまでの勉強会で浮き彫りになった課題や疑問など、18項目にわたって出された質問に約2時間半をかけ、真摯に答弁した。その中で防潮堤の必要性を強調したものの、住民との合意の必要性や合理的な理由があれば、計画案の変更の可能性もあることを示唆し、多くのことをもたらした有意義な意見交換会であったと思ふ。

その中で、防潮堤は住民合意がないと進まない事業であり、市としては、国や県、市と管理者が分かれている事業を調整する連絡協議会を設けて対処し、「市が物言う形」を取らせてもらっているとして今後は、国、県とともに各浜に入っ

詳細な説明をしていくという。その上で住民の意

の保全が重要であり、その事業に係る環境の保全について適正な配慮がなされることを確保し、もって現在および将来の国民の健康で文化的な生活の確保に資する」としている以上、巨大コンクリート防潮堤に環境アセスメントは実施して然るべきと思ふ。

気仙沼市は、「二度と繰り返さないこの悲劇」「自然と調和する都市構

造と市民生活」「生産性の向上、構造改革の契機」など復興基本理念を掲げている以上、沿岸の植生や生物多様性などに一切配慮していない防潮堤を「鵜呑み」にする

このころ、一部地区で地元議員が「地元ではL1防潮堤を受け入れた」と喧伝しているようだが、課題が多すぎる中

で、決してそんなことはない。先日開かれた「漁港・背後地等の復旧・復興に向けての説明会」は、防潮堤の問題を話し合つ場ではなく、あくまで漁港の早急な復旧がテーマだった。漁民が「明日に迫っている養殖ワカメの荷揚場、塩蔵ワカメの作業場の確保を」と求めているのに、防潮堤と絡めた説明は「(防潮堤を)認

街談巷説

めなければ漁港の復旧が進まない」と脅迫しているようで、地域住民の声が反映されていない説明会であり、「受け入れ」

「合意」などには、ほど遠い状況にあることに変わりはない。

菅原市長の対応に思ふ

このころ、命は防潮堤では守れないので「逃げること」を最優先にした避難道路の整備、避難訓練を徹底すれば守れるが、多様な価値観がある「財産」を守ろうとする

また、市内には、市管理の31、県管理6、国管理1の漁港がある。それぞれの漁港に合わせて復旧・復興を計画しており、原形復旧、L1対応、そのままなど対応はいろいろだが、市管理の漁港は27年度までに復旧する予定で、「基本的に守るべきものは守る」としている。

このころ、一部地区で地元議員が「地元ではL1防潮堤を受け入れた」と喧伝しているようだが、課題が多すぎる中

防は、ある程度の津波は防げるかもしれないが、

伝承などが挙げられた。

多様な地域の状況の中で、防潮堤のあり方については「漁港海岸と建設

が持てた。(近)